

子ども向け体験イベントのすすめ

理事 大橋 宏 明

東京オリンピックが開催される2020年には小学校の教科書に、翌年には中学校の教科書に我々の活躍の場である「海事産業」に関する記述が載る運びとなった。

文部科学省は今年3月末、学校で必ず教えないければならず、教育における法的拘束力を持つ、次期学習指導要領を改訂した。

小学校の次期要領は海洋に支えられた地理的条件や輸出入による諸外国との関わりの重要性等、海運の重要性への展開が期待される内容となり、中学校の次期要領は「陸上、海上輸送などの物流や人の往来などを基に、国内各地の結びつきや日本と世界の結びつきの特色を理解すること」と「海上輸送」の単語を明記したうえで資源やエネルギーの動きを学ぶ方針を示すものとなった。

今回の学習指導要領の改訂で、次代を担う子どもたちが海事産業の重要性を学ぶ機会が拡大することは間違いない。今後は同要領の内容を詳細に示すガイドラインが作成され、それに基づき各出版社からの教科書が、また副読本や先生のマニュアルなどが改訂されることとなる。より具体的な内容や写真が盛り込まれるよう、業界としての活動を強化していく必要がある。

その一方、次代を担う子どもたちがより海運業界や船舶に興味を持ち、親しみを深めてくれるよう、教育もさることながら、本船見学会などの体験型イベントの開催を強化していくことも重要だ。今夏は「海洋都市横浜うみ博2017～見て、触れて、感じる 海と日本PROJECT～」にボランティアとして参加する機会に恵まれた。私は自動車専用船見学

会に参加したが、共催されたタグボート体験乗船会と合わせれば、6,000名超えの応募者から抽選で選ばれた家族連れをはじめとする1,300名以上が生きた船を体感できる一大イベントだ。約7,000台の自動車を積載できる

巨大な自動車専用船では、自動車の積み付けのデモンストレーションが行われたほか、子どもたちが船橋でキャプテンの制服を着て舵を握ったり、エンジンの構造に関する説明をマリンエンジニアから受けて実際に教材用小型エンジンのボルトを締めたりと体験型展示を熱心に楽しんでいる様子が見受けられた。

ディーゼルエンジンに加え、モーターと高性能バッテリーを用いたハイブリッド推進システム採用のタグボートや、日本初のLNG燃料船でもあるタグボートに興味を示す子どももいれば、展示されている大型スパナや中ハンマーをボイラースーツ姿の若手マリンエンジニアと一緒にヨッコイショと持ち上げて喜ぶ子どももあり、やはり体験型イベントは子ども受けが良く、我々マリンエンジニアの仕事もあまり難しいことを考えず、子育て世代の若手マリンエンジニアの知恵を借りれば、子どもたちにも楽しく体験してもらえるイベントを開催できると実感した一日だった。

子どもたちの教科書に我々の活躍の場が記載されることになったいまこそ、子どもたちが業界に興味を持ち、親しみを深めてくれるよう、業界をあげて全国での体験イベントの開催を強化していくべきだと思う。

